

【ウパニシャッド勉強会まとめ—7月分】

73回目～74回目（2023年7月12日,26日）

7月12日「信仰について、1つの塊ですべてを知る。」

信仰についての「ラマクリシュナの福音」からの引用

信仰について、「子どものように信じる」ということが、協会発行の「ラマクリシュナの福音」の中に例えとしていくつか出てきます。

「ある人の娘が、幼いときに夫を失って未亡人になった。彼女は自分の夫に会ったことがなかった。他の少女たちの夫を見て、ある日父親に『私の夫はどこにいるのですか』とたずねた。父親は、『ゴーヴィンダ（クリシュナ的一名）がお前の夫だ。もしお前が呼べば、彼は来るだろう』と答えた。これをきいて少女は自室に入り、扉を閉めてゴーヴィンダに向かい『おおゴーヴィンダ、来てください！ 私に御姿を示してください！ なぜ来てくださらないのですか』と叫んだ。神は少女の哀れな叫びに抵抗することができず、彼女の前に現れた。人は子供のような信仰と、そして子供が母を見たいと感じるときの強烈なあこがれとを持たなければならない。そのあこがれは、夜明けの東の空の紅のようなものだ。空が明るくなれば必ず太陽が昇る。そのあこがれの直後に人は神を見るのだ。」 第16章「ドッキネッショナルで 信者たちとともに（2）（改訂版 P305）」

「あるブラーミンが、毎日食物を供えて家の神をまつっていた。ある日、彼は用事で出かけなければならなかった。出がけに幼い息子に『きょうはお前が神さまにお供えをあげなさい。神さまが召し上がられるように、よくお世話をするのだよ』と言いつけた。少年は、聖所で食物をささげた。しかし神像は祭壇の上で黙っていた。話そうとも食べようとしなかった。少年は長いあいだ待っていた。それでも神像は動かなかった。しかし少年は、神は王座から下りてきて床にすわり、供物を食べるものと確信していた。『おお主よ、下りてきて食物を召し上がってください。もうずいぶんおそいのです。私はもう、ここにすわってはられません』とくり返し祈った。だが神像はひと言も口をきかなかった。少年はわっと泣き出し、『主よ、お父さんがあなたにご飯をあげろと言ったのですよ。なぜ下りてきてくださらないのですか。なぜ、私の手からは食べてくださらないのですか』と叫んだ。心底から恋いこがれて、少年はしばらくのあいだ泣いていた。ついに祭神は、祭壇から下りてきて食物の前にすわり、それを食べた。神様が食べ終ると、少年は礼拝所から出てきた。家族の者たちが言った、『礼拝はすんだのだね。お供物を下げておいで』『ええ、礼拝はすみました。でもお供物は神様が全部召し上がりました』『それはなんということだ』と家族がたずねた。『ああ、神様がご飯をあがったのですよ』と少年は無邪気に答えた。彼らは聖所に入り、祭神がすべての供物を一粒も余さずに食べられたのを見て驚き、言葉もなかった」 第16章「ドッキネッショナルで 信者たちとともに（2）（改訂版 P306）」

このような信仰が子供のような信仰の例えですが、だんだんと成長すると、疑いが起こり、その信仰が減り、なくなります。それが私たちの現在の状態です。

前回の続き…チャンドーギヤ・ウパニシャッド 6章 12節より

sraddhatsva somya iti ; 信じてください、おおソーミヤ

この種の中に、大きな菩提樹の木が育つ力が入っています。見えませんが、絶対にあります。なぜなら、それ

を植えると大きな菩提樹になります。それが証明です。そして、最後に言っています。

「svetaketo iti : シュヴェータケートゥよ、tat tvam asi (タットワマシ) : 汝はそれである」

信じてください、シュヴェータケートゥ、あなたもブラフマンです、と。

聖典はそのように言っていますが、私たちは本当に信じているでしょうか？何回聞いても、私は〇〇、女性、男性というイメージをずっと続けていませんか？「私はブラフマン」というイメージがありません。

それでアールニがシュヴェータケートゥに、シュラッター（信仰）はとても大切、と言いました。真理の勉強の時、真理を悟る時には、とても大切です。

論理的に言うことができても、最後は信じて尊敬がなければ何も進みません。「私はアートマン」と頭では分かりますが、理論的に正しいと理解しても、本当は信じていませんから、何も結果が出ません。

真の「識別」の知識とは

前回、イエスとシュリー・ラーマクリシュナの信仰の話をしました。もう1つ、シュリー・ラーマクリシュナの直弟子のスワミー・トゥリーヤーナンダジの話があります。

スワミー・トゥリーヤーナンダジは、とてもヴェーダーンタが好きでした、「あなたは体ではない、心ではない、知性ではない、あなたはアートマンです。体がなくなっても、あなたはなくなりません。」と学んでいました。バガヴァッド・ギーター第2章 23~24 節にもあります。

ナインン チンダンティ シャストラニ ナインン ダハティ パーヴァカハ
Nainam chindanti śāstrāṇi nainam dahati pāvakaḥ /

ナ チャインン クレーダヤンティ アーポー ナ ショーシャヤティ マールタハ
Na c' ainam kledayanty āpo na śoṣayati mārutaḥ // 2-23

いかなる武器であろうと、魂を切り刻むことはできぬし、
火で焼くことも、水で溶かすことも、風で枯らすこともできない。

アッチェーティヨヤム アダーッヒヨヤム アクレッテヨ、ジョーツシャ エーヴァ チャ
Acchedyo 'yam adāḥyo 'yam akledyo 'śoṣya e va ca /

ニッチャハ サルヴァガタハ スターヌフ アチャローヤン サナータナハ
Nityaḥ sarvagataḥ sthānuḥ acalo 'yam sanātanaḥ // 2-24

この魂は、壊れもせず、焼けもせず、溶けもせず、枯れることもない。
いつでも、どこにでも在り、不変、不動、永遠の存在なのだ。

ある時、スワミー・トゥリーヤーナンダジの生涯で有名な出来事が起こりました。お坊さんになる前の名前をハリナートといい、そのハリナートが、ガンガーで毎日沐浴をしていた時の話です。

ある時、川で突然ある人がワニを見ました。その人は大きな声で他の人に気を付けるように、「水から離れて逃げてください」と言いました。それで他の人たちとハリナートも、水から離れて逃げました。しかし、本当に勉強する人の「識別」の考えが、突然出ました。

ハリナートは思いました。「私は毎日バガヴァッド・ギーターやウパニシャドを勉強して、その中のメッセージの何を学んでいたのか？体は殺すことも、燃やすこともできるが、私は体ではない、私はアートマンです。私は純粋な意識です。純粋な意識は物質ではない。体ではない。そして、ワニが私を殺して食べたら、その私は何か？ 体が私、だけれども本当は体ではない。」

そのように識別して、「『私はアートマン』なのだから、そのことを知っていれば怖いことは何もない。どうしても私は恐がってガンガーから離れるのか？どうして逃げるのか？」、そのことを考えて、もう1回ガンガーに入りました。

普通の人、もう1度川に入るようなことはしません。私たちは勉強していますが、何人の人がそうするでし

よう。誰も絶対にしません。

それは、私たちの勉強は、頭のレベルだけで、本当に大切な時に識別をしていないからです。

ウパニシャドの勉強の時に識別をしますが、食事の時にはしていません。快樂の時に識別はしていません。ですから、私たちは勉強の結果は、何も出ていません。人生のサポートとなるような勉強ができていません。

スワミー・トゥリーヤーナンダジと私たちとは、何が違うのでしょうか？

その違いは、突然に恐怖のサムスカーラが出ます。「私は体」というサムスカーラの記憶があるので、恐怖が出た時に、「私は体であって、アートマンではない」というサムスカーラが現れます。しかし、ヴェーダーンタの知識「私はアートマン」に戻ると、また川に入りに行きました。その時は「私は体」ではなく、「私はアートマン」という考えに戻りました。

もう一つ、靈的な実践のためにヒマラヤに巡礼に行き、洞穴ですっと瞑想していた時の話です。ある時、虎が大きな声で鳴きました。スワミー・トゥリーヤーナンダジは、まだ肉体のサムスカーラがあったので、入り口に大きな石を置きました。しかしその後、すぐに考えました。

「私はヴェーダーンタの実践のためにヒマラヤに来ているのに、まだ、死の恐怖がある。」そして、「誰が死を恐れているのか？」と考えました。無知の人には死の恐怖がありますが、悟った人には死の恐怖がありません。悟った人はいつも「私はアートマン、私はアートマン」と考えています。アートマンは純粹意識ですから、死にません。永遠です。スワミー・トゥリーヤーナンダジはそのことを思い出して、入り口に置いた石をどけました。瞑想のためにヒマラヤにいる多くのお坊さんは、絶対、入り口に石を置きます。なぜなら、そこまでヴェーダーンタを信じていないからです。

「アートマンは体ではない」「私はアートマン」と、いつもその知識が続いているのが、本当の信仰です。

信仰を深める過程の疑問（障害）について

私たちの状態について3つの疑問があります。

1つ目。「私は体ではない」と、普通の人は思いませんが、インド哲学や聖典を勉強している人は、「私は体ではない」といつも聞いたり、読んだりしています。

「アートマンは、始まりも終わりもない、死ぬこともない。肉体は『生まれて、存在して、変化して、衰えて、亡くなります』。しかしアートマンはその状態ではありません。」と聞いています。

しかし、本当に皆さんは信じていますか？深刻な病気があると死の恐怖が出ます。また、地震や津波が起きた時に、死の恐怖があります。避難するのは、それが原因ではないですか。それがないと絶対逃げません。それが私たちの基準です。信仰があるか、ないか、の基準です。

2つ目は、バガヴァッド・ギーター5章21節に書いてあります。

バーッヒヤ・スバルシェーシュ アサクタートマー ヴィンダティアートマニ ヤット スカム
Bāhya-sparśeṣṣv asaktātmā vindatyātmani yat sukham /
サ フラフマ・ヨーガ・ユクタートマー スカン アクシャヤン アシュヌテー
Sa brahma-yoga-yuktātmā sukham-akṣayam aśnute // 5-21

外界の感覚的快樂に心惹かれることなく、常に内なる真我の楽しみに浸っている人は、
常に至高者に心を集め、限りなき幸福を永遠に味わっている。

私たちの本当の楽しみの源はどこですか？外ですか？中ですか？

「本当の至福の源は、外ではなく中にあります」ということです。

バガヴァッド・ギーターの中に3性質のスカ（楽しみ）があります（サットイク・スカ、ラジャシク・スカ、

タマシク・スカ)。

「サツティク・スカ (サットワの楽しみ、アーナンダ)」の基準は、バガヴァッド・ギター18章 37 節にあります。

ヤット タド アグレー ヴィシャム イヴァ パリナーメー ムリトー パ マ ム
Yat tad agre viṣam iva pariṇāme' mṛt'opaman /

タッ ス カ ン サットヴィカン プロクタム アートマ・ブッディ・プラサーダ・ジャム
Tat sukhani sāttvikāni proktam ātma-buddhi-prasāda-jam // 18-37

初めは毒薬のように苦しくても、終りには甘露となるような、
真我を悟る清純な知性から生じる喜びは、サットワ的幸福と言われる。

「初めは毒薬のように苦しくても、終りには甘露となる」、その種類の楽しみがサツティク・スカ (至福) です。そして、そのサツティク・スカは、^{アートマ・ブッディ}ātma-buddhi、アートマンから出ています。これがとても大切です。

18章の中に、サツティク・スカについての性質が2つあり、そのうちの1つは、^{アートマ・ブッディ・プラサーダ・ジャム}ātma-buddhi-prasāda-jam。その種類のスカの源はアートマンです。外ではありません。私たちは、そのことを信じていませんから、いつも外のものからの楽しみを欲しがります。美味しいレストランやショッピングなどで快樂を探している状態です。

「中を探してください」と、本当の信仰がどれくらい特別なのかを知るために、何回も言っています。本当に信じることができれば、外の快樂への興味がなくなってきます。

靈的な人になっていくと、世俗的な友達の数も減ってきます。世俗的な友人が沢山いると、靈的な人にはなれません。友達は多くても、靈的な友人が少ないので、靈的になれません。

自分が靈的になっている人かどうかは、それが基準です。まだ外への快樂を求める気持ちがあるなら、靈的な人にはまだなっていません。

ほとんどの人は、「本当の楽しみは中にある」ということを信じていませんから、旅行に行ったり、海水浴で楽しんだりします。しかし「本当は、旅行などで自分は楽しみたくはないけれど、家族に合わせないといけませんから、その理由で行きます。それだけです。」、そのような考えがあるか、自分自身で内省しないといけません。

「私は靈的になってます。神様のことを時々考えています。勉強して、時々協会にも行ってます。」それで靈的になっていると思っても、快樂が好きだったら、靈的成長はまだまだです。

3つ目は、信仰の障害についても気を付けなければいけません。そのために、どのように神様への信仰を増やすかを考えないと、いつも矛盾がおきます。

プレーヤ (preya・快樂) とシュレーヤ (śreya・至福) がある時、私たちを惹きつけます。100%プレーヤ、100%シュレーヤの状態ではありません。ある時はプレーヤが大好き、またある時はシュレーヤが大好きではなく (少し) 好き…両方を大好きにはなれません。そのことに気をつけないと、信仰のレベルが上がりにません。

また、いろいろな楽しみを比べて、「神様の楽しみが最高の楽しみ」ということを理解する必要があります。次のような言葉があります。

ヴィシャヤーナンダ (Vishayananda)、バジャナーナンダ (Bhajananda)、ブラフマーナンダ (Brahmananda) お坊さんの名前で、スワーミー・バジャナーナンダという名前があります。最初と最後のスワーミーとアーナンダは同じですが、中の名前が違います。スワーミー・メーダサーナンダ、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダなどです。

^{バジャナーアーナンダ}Bhajana-anandaとは、「神様の名前をいつも唱えて瞑想する」という意味です。靈的な実践が大好きでいつもそうしているのがバジャナーナンダです。似たような言葉で、ボジョナーナンダという言葉もあります。このボジョは食事をするという意味があります。

ラーマクリシュナ・ミッションのお坊さんの中に、食事が好きでたくさん食べるお坊さんに対して、冗談で、

「あなたは、バジャーナングではなく、ボジョナーナングです」という時があります。

その^{アーナンダ}anandaですが、最高のアーナンダが、ブラフマーナングです。

「ラマクリシュナの福音」の中に、ヴィシャヤーナングという言葉があります。世俗的な物が好きという意味で、その中にボジョナーナングもいろいろな快樂も含まれています。

その反対がバジャーナングで、神様の名前を唱えたり、キールタンをしたり、神様を瞑想したりすることが大好きです。その最高のバジャーナングが、ブラフマーナングです。

このように、私たちは知ってはいますが、ブラフマーナングではなく、普通の快樂が好きになっています。どうしてそのような信仰が現れないのでしょうか。

神聖化への道のり

それは、私たちの心が、まだ綺麗ではないからです。心が綺麗ではないので、何回聞いても勉強しても頭で理解しても、どうしても信じることができません。

子供の心は綺麗ですからすぐに信じますが、成長するにつれて、無知や欲望や執着が出て、だんだんと汚くなります。それが原因です。

私たちの心は、今、土埃がついた鏡のように、結構汚れていますから、綺麗に反射できない状態です。そのような心では、アートマンは反射しません。

その埃とは、タマスの、ラジャスの、否定的な感情とサムスカーラです。そして、いつも一時的なもので忙しくなっていて、永遠のもので忙しくなってはいません。

それを神聖化することができる、世俗的なものがなくなり、すべてが神のものです。それがないために、いつも世俗的に、靈的にも困っています。神聖化できなければ、欲望、執着の考えが出ます。そのためにはいろいろなやり方があります。

今度は別の例えです。

Yathā saumya ekena mṛtṭpīṇḍena sarvam mṛṇmayam vijñātam syāt /

Vācārambhaṇam vikāro nāmadheyam mṛttikā ityeva satyam // (chāndogya upaniṣad6.1.4) 注1)

訳：息子よ、たとえば1つの土の塊を知ることによって、土でつくられたあらゆる物が知られるように、異なるのは名前のみであり、それは言葉から発生するのであって、真実は全てが土ということである。(父ウッターラカ・アールニは、息子シュヴェータケートゥに言いました。)

yathā：例えば saumya：ソーミヤ、若者、とても穏やかな顔を持っている人 ekena：1つの
mṛt：土の pīṇḍena：塊を知ること sarvam：すべての mṛṇmayam：土製のものを
vijñātam：理解できます syāt：おそらく vikāro：変化は nāma：名前 dheyam：置く
vāc：言葉 ārambhaṇam：起こるだけです mṛttikā：土 ityeva：であることが
satyam：真実です、実在です

アールニは、自分の息子シュヴェータケートゥに「あるものを知っていれば、すべてのものを知ることができるものは何か」と質問しました。シュヴェータケートゥは知らなかったので、「教えてください。」と言いました。

例えば、ご飯の炊き具合を知るには、米粒1つをジャーから取り出して、指で潰してみます。それでご飯の炊き具合が分かります。すべての米粒を潰す必要はありません。

また、薬にも万能薬というのがあります。それ1つですべての病気が治る薬です。そのような薬はありません

が、万能薬という言葉はあります。

アールニは、そのことを言いましたが、息子は知りませんでした。その時、シュヴェータケートゥに教えるためにアールニは3つの例（塩と水の例え、菩提樹の種子の例え、土の塊の例え）を使いました。

土でできたものと、別の土でできたものとは何が違うのでしょうか。

言葉だけが違います。土でできたものには、名前があります。土鍋、陶器の皿、陶器のお椀、など名前が違います。名前の元は言葉です。言葉だけ違います。もちろんその中には形も含まれます。最初は基礎の土で作ります。作った後も本当の基礎は土です。壊れていても、名前と形がなくなっても、基礎は土です。

土はずーっと続いています。土は永遠です。土が実在です。もちろん相対的な意味で言っています。絶対的な意味ではありません。今は、例えで理解できるように、相対的な永遠を使っています。

すべて土でできていますが、名前と形が違います。最初の状態、途中の状態、最後の状態は土です。名前と形、使い方、性質などありますが、すべて一時的です。真実は「土」ということです。

この例えで、次のようなシャンカラチャーリアのコメントがあります。

すべてのものを作るためには2つの原因が必要です。椅子、机、食べ物、建物…を作るにも2つ必要です。

1つは、作る人。minitta kārāṇa（ミニッタカーラナ）

もう1つは、材料。upādāna kārāṇa（ウパーダナカーラナ）

机は、作る人と木材が必要です。これがなかったら、机はできません。

シャンカラの考えで、ウパーダナカーラナが1つなら、その種類の基礎はすべて同じです。土でできたコップ、茶碗、お皿、鍋、すべて同じ土です。ミニッタカーラナが別々でも、材料が1つなら、その種類のものはすべて同じです。名前と形、使い方、性質が違いますが、基礎は同じ、土だけが同じです。土だけが永遠です。

ですから、土で作った物を1つ知っていれば、土でできたすべてのものの本性、エッセンスが理解できます。

この例えは、1つのものですべてのものを理解できる、ということの関係で使っています。

7月26日「化学的に知る」と「霊的に知る」

論理的思考について…物質的な意味と哲学的な意味を考える

「土の一塊を知っていれば、土で作ったすべてのものを理解できます」という言葉は、どのようなことをイメージするのでしょうか？

「ヴィッギヤータム＝理解する」ですが、何を理解することでしょうか？ これは、文の前後関係でいろいろな理解の意味があります。よく理解できるように、同じことが繰り返し出ています。

「理解する」という言葉については、物質的な意味と哲学的な意味があります。普通は物質的な意味でこの言葉を使っています。本当は霊的な意味でこの「塊」という言葉を使っているわけではありません。そのために、科学的に良く理解しないとイケません。

理解する物は、土の塊です。土は物質です。ですから、物質の化学的性質を理解することで、そのものを理解することができます。化学的に理解するには、化学的性質と化学的組成を知ることが必要です。

Chemical Composition 化学的組成は、

ChemicalComposition 化学的組成: English	Japanese
silicon	ケイ素
Aluminum	アルミニウム
Iron	鉄
Calcium	カルシウム
Potassium	カリウム
Sodium	ナトリウム
Magnesium	マグネシウム

これが Chemical Composition 化学的組成です。

また physical composition 物理的組成があります。

PhysicalComposition 物理的組成 : English	Japanese
Grains of soil (soil particles)	土の粒 (土粒子)
Mineral	鉱物
Sand	砂
Clay	粘土
Water	水
Air	空気

哲学の中では、五つの要素空「(アカーシャ) 風 (ヴァーユ) 火 (テージャス) 水 (アプ) 地 (クシティ)」で作られています。とてもよく似ています。

そして、生物学的組成もあります。

BiologicalComposition 生物学的組成: English	Japanese
Rock / Crag	岩
Soil Organic Matter Dead insects, plants and animals	土壌有機物 死んだ昆虫、動植物
Plant	植物
Bacteria	バクテリア
Water	水

セミは夏が終わると死んで、分解されて土に混ざりますが、生物学的組成では、死んだ昆虫や動植物の分類に入ります。これら「化学的組成、物理的組成、生物学的組成」すべてが、物質的についてのすべてのイメージで

す。物質をよく知るということです。

哲学的な意味での見解は、後程説明しますが、化学的に「土の塊について、よく知る」ということは、このようにして知るということです。しかし、これらの勉強は科学者のものです。

ポイントは「よく知っていれば」という言葉の意味です。私たちは、インド哲学の勉強をしています。科学者ではありません。しかしどうして、哲学の勉強でこの物質的な話をしているのでしょうか？

なぜなら、「あるものを知っていれば、すべてのものを知ることができる」からです。哲学的には、1つの塊を知っていれば、創られた他のものすべてを理解することができるからです。

基本的なものは同じですが、そのもので創ったものがいろいろあります。その、いろいろなものの違いは何でしょうか。

違いは、名前と形です。

その前に、1つの土の塊を理解すれば、土で作った鍋や皿など、すべての土の創作物の本質が何であるかを理解できます。名前と形を取り除くと、基本的なものは同じ土です。

すべてのものの基礎は同じですが、どうして別々に見えるかということ、ウパニシャドでは、名前と形、使い方が違うと言います。ウパニシャドでは、名前と形、使い方は、一時的で、なくなりますが、基礎はなくなると言います。

「1つのものを理解すれば、すべてのものを理解することができる」という論理的思考 (logical thinking) について、正しい論理展開には、帰納的推理 (inductive logic) と演繹的推理 (deductive logic) ^{えんえき} 注2) などがあります。

反対に、すべてのものの本性はアートマンです。あるものを知っていれば、すべてのものの本性を理解できます。よって、あるものとは、アートマン、ブラフマンです。という哲学的な考え方で、演繹法による推測の結論が出ます。そして、アートマン、ブラフマンのことをよく知っていれば (本性を理解すれば)、そのすべてのものの本性、基礎的なものを理解することができます。

なぜならアートマンは遍在です。私たちには、マーヤーの影響によって別々に見えますが、本当は1つだけです。名前と形は一時的なものです。仮に、あなたが100個の鏡を持っていたとして、太陽の光に鏡を反射させると、100個の太陽が映し出されます。私たちはマーヤーの影響で太陽が100個あると思います。しかし、鏡は一時的で、壊れて捨てることとなります。その時、捨てた鏡の数の太陽はなくなります。本当の太陽は1つだけです。

同じように、私たちには、アートマンがいっぱいに見えますが、本当のアートマンは1つだけです。マーヤーがある間はそのことを理解できません。悟るときに理解できます。

日本の人口は1億2千万人ぐらいですが、すべてがアートマンではありません。アートマンは1つだけです。名前と形と性質は一時的です。その一時的なものは終わりますが、アートマンはなりません。

パンチャ・コーシャ (五つの鞘) を理解すれば、コーシャ (鞘) はなくなります。しかしアートマンはなりません。

土で作ったものは、名前も形も性質も使い方も違いますが、壊れてしまえば、また土に戻ります。私たちも同じです。そのマナナが必要です。

意識の特徴に関する疑問について

すると、疑問が起きます。アートマンは純粹意識です。その意識の特徴は、「話ができる。動くことができる。自分の意志があること。」です。すべての生き物の中に意識があることを、私たちは理解できます。しかし、物質です。アートマンは遍在です。生き物の中だけではなく、椅子や机の中にも意識はあります。しかし、椅子や机は、話しません。動きません。意識はありません。

一般的に、生き物と物質の違いの基準は、意識があるかないかで判断しています。それが基準です。しかし物質の中にも意識があります。本当は意識以外何もありません。

それでは、机や椅子の中のどこに意識がありますか？意識はありますが、寝ています。現れていません。現れているか現れていないかの違いです。

本当は、生き物と物質ではなく、「物質と意識」の違いだけです。本性は何も違いません。

例えば、原子を考えると分かります。机も椅子もたくさんの原子の集まりです。そして、その1つ1つに物凄いエネルギーが入っていることが分かっています。エネルギーは目に見えませんが、科学者は原子爆弾を作ることで証明しました。

これと同じように、すべてのものの中にアートマンが入っています。すべての力の源はアートマンです。

この宇宙は3つのもので作られています。エネルギー（力）、物質（材料）、意識（作る人）です。作る人の中に意識があります。もっと深く識別すると、最終的には、意識だけがあります。意識からすべてが出ています。これが科学者と哲学者の大きな違いです。

普通の科学者の考えは、最初は物質。その物質から、エネルギーと意識が現れています。哲学者は反対で、最初は意識。意識から、エネルギーと物質が現れています。今はその科学者と哲学者のギャップが段々なくなってきました。そして、現在の物理学者は、サーンキャ哲学、ヴェーダーンタ哲学が正しいことを理解しています。

エネルギー、物質、意識、その中で永遠なものは何ですか？源は何ですか？意識です。そのブラフマンから、プロセスを経て、宇宙が現れています。

ブラフマンからプラクリティが現れ、精妙な物質から、粗大な物質を混ぜて宇宙を創っています。また、破壊の時は、粗大なものから、精妙に、もっと精妙に…最終的に意識だけになります。ブラフマンだけです。

そしてブラフマンから現れて、ブラフマンに戻る、その間の部分の状態が、名前と形の状態です。それがマーヤーの影響です。

私たちが見ている、国、宗教、男、女、年取った人、若い人…違って見えますが、本当は1つのものです。マーヤーの影響によって私たちは別々に見えます。

ウパニシャドに美しい言葉があります。

「アートマン、ブラフマン、あなたは男性、あなたは女性、あなたは若い男性、あなたは若い女性、皆同じです。」

すべての宇宙の源はアートマンです。それがマナナです。

どうして私たちにはブラフマンが見えないのか

もし、私たちが悟ると、すべてのマーヤーがなくなります。すべては霊的な幻です。砂漠の蜃気楼や自分の目の錯覚で、太陽が月と同じ大きさにみえたり、電車に乗って窓から景色をみて、木や建物がすごい速さで動いているように見えたりします。また、昔の人は、地球の周りを太陽が回っていると思っていました。これらはすべてオプティカル・イリュージョン（目の錯覚）です。

同じように、みんなに無知があるので、そのように見えます。これを adhyāsa (アッディヤーサ) といいます。何回も心で識別すると、アートマン以外何も無いことが理解できます。

これはヴェーダーンタでは有名なコンセプトです。何が幻になっていますか？名前と形のアッディヤーサです。本当はブラフマンには、名前も形もありませんが、マーヤーの影響で、私たちはアッディヤーサを重ね合わせています。基礎はブラフマンです。そのことをいつも識別するのがマナナです。

私たちはどうしてブラフマンが見えないのでしょうか。なぜなら、自分の中に問題があります。例えば、黄疸の人は、目に黄疸が出ると、いろんなものが黄色に見えます。その人の目の問題です。私たちも霊的な病気で、ブラフマンを見ないで、別々のものを見ています。無知の影響で別々に見えますから、それが原因です。

私たちの怒りの原因、エゴの原因、欲望の原因、性質の原因は、それです。悟った人にはそれがありません。バガヴァッド・ギター6章30節の一部にあります。

ヨー マーン パッシャティ サルヴァットラ サルヴァン チャ マ イ パッシャティ
Yo mān paśyati sarvatra sarvaṁ ca mayi paśyati /6-30

森羅万象いかなる^{ところ}処にも私*を見、私*の中に森羅万象を見る人 *至高者(クリシュナ神)

そのような人は、怒りもなく、嫉妬もなく、エゴもありません。なぜなら、自分で自分のことは嫉妬しません。それが違います。そのために私たちは、心を綺麗にしないと、そして無知のマーヤーを取り除かないといけません。想像だけではできませんから、そのやり方があります。

*Yathā sauṁya ekena lohamāṇinā sarvaṁ lohamayaṁ vijñātam syāt /
Vācārambhaṇam vikāro nāmadheyam loham ity eva satyam // (chāndogya upaniṣad6.1.5)*

(おおソーミヤ、) また、1つの金塊を知ることによって、金で作られたあらゆる物が知られるように、異なるのは名称のみであり、それは言葉から発生するのであって、真実はすべてが金である、ということである。

(協会発行「ウパニシャド[改訂版]P137」)

yathā : 例えば saumya : 息子よ ekena : 1つの lohamāṇinā : 金の塊 sarvaṁ : すべての
lohamayaṁ : 金製のものを vijñātam : 理解できます syāt : おそらく vāc : 言葉
ārambhaṇam : 起こるだけです vikāro : 変化は nāma : 名前 dheyam : 置く
loham ityeva : であることが satyam : 真実です、実在です

前の土と同じで、金の1つの塊をよく知っていれば、金で作ったすべてのものを理解することができます。

また、科学者の見解で理解すると、金の科学的性質は、錆びない、酸化しにくい、柔らかい、展性、延性がある、化合物でない。これが科学者の見方で、金の塊についての知識です。

哲学者の考えは、名前と形が違うと言っていますが、どうして金の例えを使っているのでしょうか。

それは、アートマンについて、霊的な説明をしたいのですが、その理解が難しいので、物質的な例を使って何度も説明しているのです。土と同じように、アートマンはすべての中に存在していて、すべてのものの基礎ですが、名前と形、性質、働きは別々に見えます。そのように金の例えを理解してください。金で作った、ネックレス、イヤリング、ノーズリング…使い方は別々ですが、物は金です。最初も金、途中も金、最後も金です。

また、次の例もあります。

*Yathā somyikena nakhanikṛntanena sarvaṁ kārṣṇāyasaṁ vijñātaṁ syādvācārambhaṇam vikāro nāmadheyam
kṛṣṇāyasamityeva satyamevaṁsomya sa ādeśo bhavātīti / (chāndogya upaniṣad 6-1-6)*

鉄の例です。鉄で作った物も、形も名前も使い方も違いますが、本当の物は鉄です。鉄は永遠ではありませんが、相対的な意味で永遠です。

そのように、結論は、すべての中にアートマンがありますが、マーヤーの影響で別々に見える、ということです。本当のものは同じです。

注1) 協会 HP「ウパニシャッドからの引用句」⑰ (P7) をご参照ください。👉[クリック](#)

注2) 演繹^{えんえき}的推理に関して

帰納法とは、複数の観察事項（事実）などから共通点を探し、根拠をもとに結論を導き出す方法です。演繹法とは、一般論やルールや観察事項や法則に基づく物事から、結論を導き出すということです。帰納法は複数の事実や観察事例から一般論となり得る結論を導き出しますが、演繹法は一般論に基づく物事に当てはめて結論を導き出すという違いがあります。

・帰納法の例

「日本のカラスは黒い。インドのカラスも黒い。中国のカラスも黒い。よって、世界のカラスは黒いです。」
というように、根拠をたくさん集めて結論を導く方法です。

・演繹法の例

「あなたは生物です。生物は死にます。よって、あなたは死にます。」
というように、根拠と根拠を結び合わせて結論を導く方法です。